

赤野井湾における真珠母貝生産実証事業の効果調査

佐野聡哉・井戸本純一・鈴木隆夫

1. 目的

本県における淡水真珠養殖業の再興のためには、真珠母貝の増産が必要である。加えて、母貝生産の拠点となる水域は、水質等の環境変化による生産不振に備えて多数存在することが好ましい。そこで、近年は漁場環境が改善傾向にある赤野井湾において、実証試験として事業規模での母貝生産を行い、真珠母貝生産拠点としての評価を行った。

2. 方法

2021年10月に赤野井湾内の真珠養殖漁場(図1)のA漁場に3,400個およびB漁場に600個の稚貝を垂下した。各漁場に垂下した稚貝から無作為に抽出した各100個体について、2022年の3月と11月、および垂下から1年半経過した2023年3月に生残と成長の推移を調べた。生残は、1個体ずつ目視で生死を確認し、死殻がなく行方不明になった個体については死亡したものとして取り扱った。成長は稚貝を並べて写真撮影し、パソコン上で画像データを基に殻長を測定した。

3. 結果

垂下半年後の2022年3月の生残率は、A漁場が88%であったのに対し、B漁場は47%と低かった。その1年後の2023年3月にはA漁場67%、B漁場43%まで低下し、両漁場共に垂下1年半後の生残率として過年度の平均84.9%よりも低くなった(図2)。

平均殻長は垂下時に16.5mmであったものが、1年半後の2023年3月にはA漁場75.5mm、B漁場72.7mmまで成長した(図3)。これは前年と同程度の成長である。

生残率が低かった理由として、2021年末の寒波や2022年夏季のこの水域におけるアオコ発生が関係している可能性がある。

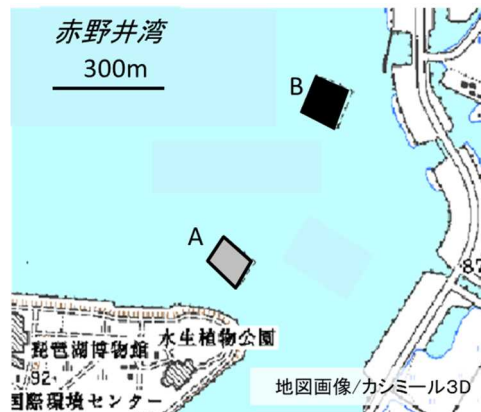


図1 実証試験を行った漁場(A、B)

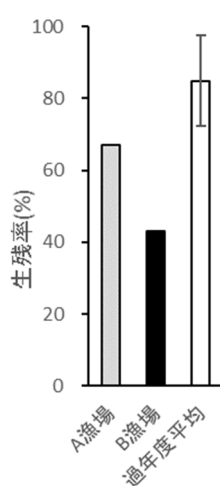


図2 垂下1年半後の生残率 (エラーバーは標準偏差)

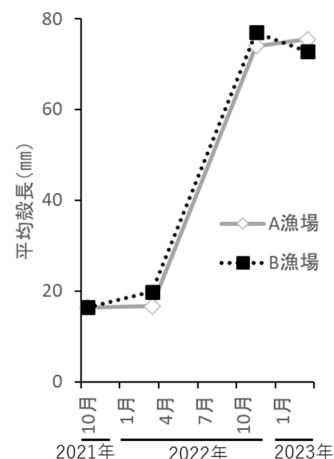


図3 両漁場における平均殻長の推移



図4 2023年3月(垂下開始から1年半後)の母貝(A漁場)